慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成31年度 入学式

パシフィコ横浜での入学式の様子

平成31年4月1日に慶應義塾大学入学式がパシフィコ横浜にて行われた。当日は雨天であったが、新入生の瑞々しい活気と保護者や教員による華やかな祝賀の雰囲気の中、式は執り行われた。

開式ののちに、青山藤詞郎常任理事によって学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6474名、医学部114名、看護医療学部99名、薬学部214名であった。慶應義塾大学全体としても医療系学部としても昨年度の入学者数から大きな変化はなかった。

続いて、長谷山彰塾長により式辞が述べられた。塾長からは、慶應義塾大学へ入学したことに対する祝いの言葉とともに、慶應義塾が自由で大らかな気風を持ち、福澤先生の合理的で進取の精神を受け継ぎながら、独立自尊の精神を持つ人材を、社会のあらゆる分野に輩出してきた歴史が実例をもって紹介された。それらの例のように、周囲に流されることなく、主体的に自分自身の人生や社会の進むべき道を見つけ、困難を創意工夫によって乗り越え、目標に向かって進んでゆくのが慶應義塾で学ぶもののとるべき道であると説かれた。塾長から新入生に望むこととして、ただ一つ、どんな分野であれ塾生生活の中で自ら目標を見つけ、目標を達成してほしいということが述べられた。最後に、新入生たちが義塾の気風の中で、楽しく充実した塾生生活を送ることを祈念され、式辞は締めくくられた。

式辞に引き続き、長谷山塾長によって壇上者の紹介がなされた。教職員代表式辞においては、経済学部で学習指導も担当しておられる駒形哲哉教授により、学生生活へのアドバイスが贈られた。大学では専門分野を究めることを学びの一つの到達点としているが、福澤先生は学びを通して知徳と気品を兼ね備えた、社会を先導するに相応しい人材を育成することを目標としておられた。大学は学問を通じた人間形成の場であり、そのためには、与えられた環境で全力を尽くし、与えられた環境を理解して活用することが必要だと述べられた。

続いて新入生代表入学の辞として、法学部の田中美帆さんより、慶應義塾大学に入学した喜びと、独立自尊の精神を持つために義塾で多様な価値観を学びたいという抱負、新しい時代を担う覚悟と決意を胸に、新入生一同切磋琢磨してゆくという誓いが述べられた。その後、卒後50年記念1969年110年三田会寄付目録贈呈として幹事の渡辺弘二さんから贈呈が行われ、会長の麻生泰さんから挨拶のお話を頂いた。それは、大学入学は新たな生活の始まりであり、これから世界に羽ばたくために以下の三つの力をつけてほしいというものだった。一つ目は、長くなった寿命を見据えて、何をするにも必要となる体力、二つ目は今後起きるであろうグローバル化と技術の進歩で必要となる語学力とIT力、三つ目は姿勢だけでなく、人望や教養など内面から湧き出る魅力である。

最後に塾歌の斉唱が行われ、閉式となった。新入生6474名の入学を喜ぶとともに、今後の活躍に期待したい。

（3年　松岡隆真）

第14回 白衣式

決意も新たに、いざ臨床実習へ

去る3月23日、平成30年度白衣式が、本塾北里講堂にて行われた。本塾では、2006年に日本初である第1回目の白衣式が行われ、今年で14回目を迎える。

式典には天谷雅行医学部長、北川雄光病院長、武田純三四会長、末松誠国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）理事長らが列席し、臨床実習を控えた100回生（新5年）112名に、祝辞を送られた。天谷医学部長は、白衣を着ることの意味や、医師としてのプロフェッショナリズムを持つことの重要性などについて語り、慶應病院の新棟で臨床実習を行う100回生を祝福した。

これから臨床実習に臨む100回生たち

北川病院長は白衣姿で列席し、自身の着ている襟の立った白衣のルーツについて述べた。また、時として白衣は威圧感や恐怖感を与えることがあるとしたうえで、「白衣は高潔さや誠実さ、謙虚さの象徴であってほしい」と語り、患者さんと接するにあたっての心構えを説いた。

武田三四会会長は近年の医療技術の進歩について触れ、高度化・多様化する医療の現場において職種や診療科の垣根を超えた協力が欠かせなくなってきていると述べられた。なお、三四会からは同白衣式の記念品として、印鑑付きボールペンが100回生全員に贈呈された。

医学部長を務めていた際に当時の学生から贈られたという白衣を身に纏った末松先生は「患者さんが凍えていたり震えていたりしたら自分の白衣を脱いで患者さんにかけてあげるぐらいの気持ちでいてほしい」と述べ、医師としての心構えを説いた。また、自身が中心となって取り組んだ組織の旗揚げの苦労を振り返り、学生たちに激励のメッセージを送られた。

末松理事長による祝辞

その後、100回生の第2～第4学年の講義を担当した各科の先生方からのメッセージビデオ（100回生制作）が放映され、懐かしい先生方からの言葉に会場は和やかなムードに包まれた。

そして、いよいよ白衣の授与である。参加した学生一人ひとりが、医学部・病院の執行部の先生方、杉本なおみ看護医療学部教授、金澤秀子薬学部長、来賓の先生方に白衣を着させて頂いた。真新しい白衣を着た学生がずらりと並ぶと、会場からは大きな拍手が沸き起こった。今年は例年同様、北里講堂に入りきらなくなるほど父兄の参加が多く、父兄らの関心の高さが伺えた。その後、100回生112名により、誓いの言葉が唱和された。

誓いの言葉は、有志により組織された白衣式委員会を中心に、100回生全員が協力し、数ヶ月をかけて考えられたものである。112名が声をそろえて誓いの言葉を読み上げると、会場からはより一層大きな拍手が沸き起こった。

最後に、門川俊明医学教育統轄センター長が閉会の辞を述べた。「100回生がこれから臨床に出て行くことについて、OSCEなどを見ているとまだ不安も残る」と語り始めた門川教授は、「現場で積極的に学んでいってほしいし、余裕が出てきたらカリキュラム以外のことにも取り組んで、いずれは慶應の中などの居心地の良い場所だけでなく、少し居心地の悪い場所にもあえて出て行くことでより成長できる」と語り、100回生を激励した。

この白衣式を終えることで100回生は医療界の門戸を叩き、実際の臨床現場に出て医療および医学をより深く学んでいくことになる。4月から始まる臨床実習では、たとえ悩み迷うことがあっても初心に帰って誓いの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいってほしい。

（3年　山田慶英）

100回生 誓いの言葉

私たち100回生は
患者さんのより良い明日へ貢献し、
人類奉仕の責任を果たすこと
自分の置かれた環境への感謝を忘れないこと
独立自尊の人として、
己の目標に対して真摯に在ること
をここに誓います。

慶應義塾大学医学部 百年記念誌を発行

医学部百年記念誌編集委員長　福田　恵一（循内62回）

私は北里医学図書館長を8年間務めましたが、この間に慶應大学医学部六十周年記念誌が発行され慶應医学の成り立ちが克明に記載されていることを知り、とても感銘いたしました。

2017年に開設100年を迎える慶應義塾大学医学部は、この1世紀にわたる歴史をぜひ1冊の書籍としてまとめ、後世の後輩達に残すことがこの時代を生きる我々の使命であると考えました。当時の岡野栄之医学部長と相談し、これを慶應義塾大学医学部開設100年事業の一環として位置づけること、慶應医学の歴史をまとめる編集委員会を組織することを決定いたしました。医学部・病院の出来事を後世に残すことは一大事業であり、多くの人間が精力的にまとめなければ完成を見ない仕事であります。

本書は医学部関係者にとって待望の新病院棟1号館開院（平成30年5月）までを収録することとし、企画から完成まで3年以内でまとめることを目指しました。このため、基本的には毎月1回、最終段階では毎週1回の会議を持ち、委員は一丸となって精力的に取り組みました。

本書の構成は、医学部全体の流れを通史に記述し、各教室・部門の歴史は教室史として記載することとしました。通史の第1部60年は以前の記念誌からの抜粋を基本とし、第2部にあたる直近の40年に関しては歴代の医学部長、病院長ほか関係者にインタビューする形式で情報を収集いたしました。不足分は北里記念医学図書館に所蔵されている医学部新聞の記載やその他の様々な情報源（書籍、記事、事務記録等）から事実確認のため情報を収集致しました。教室史の頁は各教室の規模や歴史を踏まえて公平に割り当てたつもりですが、全体の頁数に制約があるためその多寡は事情をご推察の上ご容赦頂きたいと思っております。

読みやすく、見て楽しい誌面にするため、可能な限り多くの写真を取り込もうと、関係者に写真の提供を依頼しました。特に古い時代の写真を収集することは極めて難しいことでしたが、北里記念医学図書館に保存されている卒業アルバムほか、貴重な写真記録が大きな役割を果たしました。また、医学部の歴史には直接的に関係ないまでも皆の記憶に留めおきたいエピソード等はコラムという形でまとめ、読み物として楽しめる内容にいたしました。

編集の最終段階では天谷雅行医学部長の陣頭指揮のもと、記事項目や写真の取捨選択、文章構成のバランス等、長い目で見た時の評価に耐えうる内容とするための配慮に最善を尽くしました。本書は編集委員および編集事務に関わった者だけではなく、多くの協力者の献身的な支えがあって完成に至りました。誌面に限りがあるため一人ひとりのお名前を挙げることはできませんがこの場を借りて改めて深謝申し上げます。

第2回 医療連携推進フォーラム開催

地域医師会、連携医療機関の先生方をお招きする取組みとなる「第2回医療連携推進フォーラム」が、去る3月22日（金）19時より、病院2号館11階の大会議室（第一部）とレストラン「ザ・パーク」（第二部）で開催されました。

北川雄光病院長の挨拶に続き、第一部の講演会では、佐々木淳一救急科診療科部長より「新病院棟における救急医療」、続いて、小児科の山岸教授より「新しい病院棟（周産期・小児医療センター）の小児科診療」、最後に、腫瘍センター・ゲノム医療ユニットの西原広史特任教授より「慶應義塾大学病院におけるがんゲノム医療実施体制について」と題して、講演がなされました。北川病院長の挨拶と佐々木部長の講演では、連携医療機関の先生方専用の「慶應ホットライン」の運用拡大について紹介され、各医師会、連携医療機関の先生方から地域医療を支援するものと高い評価を頂きました。

20時よりザ・パークに移動し第二部・懇親会が開催され、医療連携推進部長である私の挨拶に続き、東京都医師会の島崎美奈子理事、目黒区医師会の花谷勇治会長、世田谷区医師会の小泉孝夫副会長、ならびに玉川医師会の吉本一哉会長よりご来賓のご挨拶を頂きました。続いて渋谷区医師会の井上荘太郎会長による挨拶、乾杯の発声により歓談に入りました。

会場のスペースの関係から、今回ご招待したのは、各医師会の役員の先生方を中心とした形となりましたが、各医師会から会長、副会長にご臨席を頂き、理事の先生方を含めて、東京都医師会から1名、渋谷区医師会から18名、目黒区医師会から14名、世田谷区・玉川医師会から7名、ならびに地域連携医療機関の先生方が20名、計60名の先生方にご出席を頂きました。

佐々木淳一救急科診療科部長による講演

慶應は、北川病院長、副病院長5名、松田事務局長、加藤看護部長の8名の病院執行部、各診療部門より医師31名、ならびに師長等7名の職員、計49名の体制でお迎えを致しました。

会場となるザ・パークの全面的な協力を得て、懇親会は大いに盛り上がり、各所で名刺交換が盛んに行なわれました。最後に、松田事務局長より挨拶と中締めが行なわれ、ご希望者40数名の先生方を1号館にご案内し、会は無事に終了いたしました。今回のフォーラムは、年度末金曜日夜の開催でしたが、各診療科のご協力の下、お蔭様で大盛況の開催となりました。この場をお借りして御礼申し上げます。

（副病院長・医療連携推進部長　大家基嗣　66回）

ザ・パークで行われた懇親会

新入生歓迎の言葉 ―天資の発育―

三四会長　武田　純三（52回）

慶應義塾大学医学部入学おめでとう。ご両親、保護者の方も大変喜んでおられるものと思います。新入生の皆さん自身も、希望に胸を大きく膨らませているものと思います。

医学の進歩は目覚ましいものがあります。CT、MRによる画像診断、検体検査によるがんの診断技術等の開発で、これまで臨床診断できなかった疾患が診断できるようになり、治療法がなかった疾患に対して新たな治療法が確立されてきました。さらにこれからはゲノム医療が進歩し、低侵襲あるいは無侵襲による診断や治療法の開発が進むことでしょう。

これらの技術革新は、患者に恩恵を与えてきたことは間違いありません。医者にとっても、これまで診断ができなかったものが、誰が見ても診断が可能なレベルにしてきました。しかし、それで医師の仕事が無くなった訳ではありません。医学の進歩によって、医者に求められる知識や技術は、多様化、高度化、複雑化の道を歩んできました。専門分野が分かれて多くの新しい領域を生み出し、医者と看護師と薬剤師で行っていた医療が、臨床工学技士、OTなどをはじめとする多くのコメディカルを必要とするようになってきました。医師として知っておかなくてはいけない知識・技術が倍増してきました。さらに、患者との意思の疎通が求められると同時に、倫理面や心理面での配慮が重視されてきています。また、チーム医療を行う上で、コメディカルとのコミュニケーションの能力も問われています。

新病院棟の1号館が昨年の5月に開院いたしました。1号館の建設に当たっては4つのコンセプトが設けられました。クラスター診療、基礎臨床一体型医療体制の構築、医看薬の連携による医療人の育成、災害に強い都市型地域医療の推進で、いずれもが診療科間、職種間、地域間の連携を謳っています。1号館ではこのための教学のスペースを十分に確保しています。

これからの医学教育においては、医学だけを学んでいればいいのではなく、コミュニケーション能力と世界を先取りして、時代の流れを読み取る力を備えることが求められています。福澤先生は、学校は『何が起きても狼狽することなく、しっかりと真理を究めて、対処することができるように、生まれ持っている能力を発育させるところである』と言っています。世界への発信力のある慶應医学部の発展を目指して、これからの6年間に、皆さんが生まれ持っている天資が健やかに育ってくれることを祈念しています。

新入生に贈る言葉

常任理事　竹内　勤（59回）

新入生の皆様、医学部ご入学御目出度うございます。

創設者である福澤先生の建学の精神に、習慣や常識にとらわれることなく、自ら考え、自らの責任のもとで行動する『独立自尊』があります。これをはじめとした慶應義塾の理念は、脈々と教職員・塾生に受け継がれています。

激動の時代、福澤先生は、蘭学医であった緒方洪庵のもと適塾で大いに学ばれ、その中の医学への思いは七言絶句『贈医』として北里柴三郎先生に託されました。曰く、医学は、天と人との無限の知恵比べである。医師よ、自然の回復力を信じる立場であるなどと、決して言わないでほしい。千里先まで見通すと言われた離婁の願力、麻姑のように行きとどいた手によって、手段の限りを尽くすことこそ、医学の真髄である。この書は、北里記念図書館2階の第一会議室の壁に掲げられ、常に私たちを励まし続けてくれています。これに応え、北里先生は、『多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎と臨床の連携は緊密にし、学内は融合して一家族の如し、挙って斯学の研鑽に努力するをもって特色としたい』と、現在世界で叫ばれている基礎と臨床が一体となった医学を100年前に説いていました。研ぎ澄まされた感性と飽くなき好奇心を持った新入生の皆さんには、この言葉を胸に世界の先導者を目指して下さい。

医学部は2017年に開設100年を迎え、それを記念して建設が進められてきた新病院棟1号館は昨年5月にオープンしました。森をイメージした明るい院内は、患者導線とスタッフ導線が分離され臨床実習環境は格段に向上しています。質の高い最先端の医療、臨床研究が展開される念願の施設です。総合医科学研究棟と並んで、基礎―臨床一体型医学の基盤として慶應医学の次の新時代を支えることでしょう。

このステージに立って新時代を切り開くのは、君たち新入生諸君です。世界に冠たる慶應医学、次の100年を確固たるものとするために、世界を先導する素晴らしい研究、患者さんがいつも笑顔でいてくれるような質の高い医療を、教職員と一丸になって進めて頂きたいと思います。

心・知徳・体を鍛え、気品を養って下さい。足元をしっかりみつめ、真面目に謙虚に取り組んで下さい。回り道などありません。皆さんの大いなる飛翔を祈念しております。

第118回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー

新入生に贈る言葉

日　時　2019年6月29日（土）午後3:00～6:20
場　所　明治記念館　富士の間2
開会の辞　生涯教育研修セミナー委員長　村田　満
挨　拶　医学部長・慶應医学会長　天谷　雅行
挨　拶　慶應医師会長　小川　郁

講演会　『女性特有のがんにおける最近の話題』
モデレーター　青木　大輔
（慶應義塾大学医学部産婦人科学（婦人科）教授）

1「癌診療の新たなトレンドを読み解く ～婦人科腫瘍の視点から～」
阪埜　浩司
（慶應義塾大学医学部産婦人科学（婦人科）准教授）
2「乳癌診療の最新情報」
井本　滋（杏林大学医学部乳腺外科　教授）
3「ゲノム医療時代における女性のがん」
平沢　晃（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻 腫瘍制御学講座 （臨床遺伝子医療学分野）教授）

参加費　無料
日医生涯教育制度参加証交付　3単位
（カリキュラムコード：1,2,73）
お問い合せ　慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課内
生涯教育研修セミナー事務局
Tel：03-5363-3611
E-mail：med-somu-3@adst.keio.ac.jp
セミナー終了後に意見交換会を準備しておりますので、ご臨席ください。
次回セミナー開催予定：2019年10月12日

鑑賞知来

新元号が「令和」に決定された。新元号と同時に新たな事業がスタートしている。がん診療領域においては「がんゲノム診療元年」というテーマで日本臨床腫瘍学会が7月に京都で開催される。がんゲノム診療による遺伝子解析が6月頃に保険診療になるため非常にタイムリーである。がんゲノム診療は固形がん薬物療法に既知の分子遺伝学情報を網羅的に検査し診療にダイナミックに導入する試みであり国民の期待は極めて大きい。がん診療医や研究者も未知の領域へ突入するため知識の整理とともに診療体制の一新が求められ「元年」にふさわしい年になりそうである。

数百のがん関連遺伝情報を利用するゲノム診療はビッグデータの飛び交う現代社会人のニーズや感性にフィットしている。それと同時にスピーディーな情報収集と治療展開も要求される。慶應義塾大学病院は全国で11の医療機関が指定された「がんゲノム医療中核拠点病院」に認定され大きな役割を担っている。国民の期待するのはゲノム情報の応用により適切で負担が少ない治療へアクセスが容易になるという「夢のがん治療」である。

一方、問題も山積みである。「がんゲノム診療元年」の実態は遺伝子パネルによる網羅的解析の保険診療導入である。治療薬に関しては研究段階あるいは臨床試験中の治療薬が中心で、大部分が保険診療の適応外である。そのためゲノム検査を行ったにもかかわらず治療にアクセスできない患者が大量発生する可能性がある。「夢のがん治療」という往復切符を購入したつもりが実際には片道切符、という現実も待ち受けている。網羅的情報は魅力的だが、本当に必要なのはピンポイントな答えである。大量の情報の中にノイズもあり無視できないサインも混在する。

「がん難民」は診療体制の充足により改善しつつあるが「がんゲノム診療難民元年」になることも懸念される。「令和」の出典である万葉集のように多彩なコミュニケーションが大切そうである。

（腫瘍センター　浜本康夫　74相当）